

こんにちは。

G・Wも終わり、またいつもの日々が始まりましたね。

図書館員にG・Wはありません(^\_^;)

皆さんのお越しを図書館でお待ちしていました。

ただ、今年はお天気もよく、皆さん遠出にお出かけのご様子で、図書館はほどほどの賑わいでした。

今月はG・W直前に図書館に入った新しい本からご紹介します。

『水深五尋』

ロバート・ウェストール 作 金原 瑞人・野沢 佳織 訳 宮崎 駿 画

岩波書店 2009年 1995円 読み物

<お勧め年齢>

幼稚園☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年☆☆☆ 小高学年★★☆ 中学生★★★

高校★★★ 一般☆☆☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

時は第二次世界大戦中。イギリスの小さな港町に住む16歳の主人公、チャス・マッギルは、海から川への入り口にある魚河岸、フィッシュキーと呼ばれる場所で不思議な物を見つける。防水のボウルに、タバコの箱と、黄色い細いコードが巻きついた懐中時計が入っていて、そのコードがバッテリーらしきものに接続されている。

興味を持ったチャスはこれを自宅にもって帰り調べている最中、偶然この機械が発信機であることに気がつく。その発見が昨夜のUボートの襲撃とつながって…。

チャスと仲間たちのスパイ探しが始まった。

始めは遊び半分だったこのスパイ探したが、いつしか本当にスパイがいる証拠へとつながっていき、そしてチャスが辿りついた真相とは。

本の表紙と挿絵は作者のロバート・ウェストールを敬愛する宮崎駿氏が描いています。ハラハラドキドキの物語の中に、16歳の目から見た戦争への鋭い視線が描かれている作品です。

<子どもに手渡すときのポイント>

ロバート・ウェストール+チャス・マッギルとくれば、児童文学を読まれる方はカーネギー賞受賞作『機関銃要塞の少年たち』(越智 道雄 訳 評論社 1980年)を思い浮かべることだと思います。そう、この作品は『機関銃要塞の少年たち』のチャス・マッギルが16歳になって登場しています。ただ、今回改めてこの二つの作品を読んでみたのですが、訳者や出版年代が異なるせいか、二つの作品の中のチャスとその家族や友達の印象は少し異なる感じがしました。また、この作品の方は、あとがきにあるように、ウェストールの自伝的小説という側面も強く、この1冊だけでも充分

楽しめる物語となっています。もちろんこの物語を気に入ってくれた子どもに『機関銃要塞の少年たち』を勧めたり、『機関銃少年たち』が好きな子どもにこの本を勧めたりすることもできるでしょう。『機関銃要塞の少年たち』のチャスと成長した『水深五尋』のチャスの戦争や社会への視線の違いも読み比べてみると大変興味深く、作者のウェストールが本当にその年代の子どものリアルな視線を描いているんだなと感動しました。

表紙は実は宮崎駿氏の画なのですが、一見わかりづらいので一言添えてあげると子どもも興味をひくのではないのでしょうか？同じようにウェストールの作品に宮崎氏が画を描いた（こちらには漫画も入っています）『ブラッカムの爆撃機』（岩波書店 2006年）には宮崎氏のウェストールへの想いも収録されていますので、こちらも含わせて手渡してあげてほしい1冊です。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。

子ども図書館 重村 さやか